

北部エリア

姫谷焼窯跡

日本を代表する色絵磁器

繊細な筆運びと広く余白を残した中に、紅葉や、石榴、飛雁などの絵柄を清楚に配した姫谷焼。備後地方には、昔からこの優雅な焼き物がいくつか伝えられています。そして、この姫谷焼は、伊万里焼、九谷焼と並んで日本の初期色絵磁器の一つとして有名です。福山から国道182号を北に上ると、加茂町百谷の姫谷に着きます。ちょうど道路右側の小さな谷の斜面に窯は築かれています。窯跡は、昭和初期頃か



2基が重複する窯跡
発掘調査をして姿を現した窯跡。左側が1号窯で、その右に2号窯が構築されています

ら一部の研究者には知られていますが、本格的な発掘調査は、1977・78年(昭和52・53年)に福山市教育委員会が行いました。その結果、窯の構造などについて、新たな事実が判明しました。

窯は2基がほぼ平行に重複した状態で見つかりました。下にある1号窯は、全長約13mの階段状連房式登窯で、胴木間という燃料室と、焼き物を焼成する5房の空間から構成されています。2号窯は、1号窯が廃止された後、窯壁や窯道具などを埋めて整地し、その上に造られました。全長約16mで、胴木間に続き6房の焼成室が確認されています。また、1号窯は、床面が地面より少し下位になった半地下式、2号窯は床面が地表面とほぼ同じ高さで設計された地上式と呼ばれる構造をし



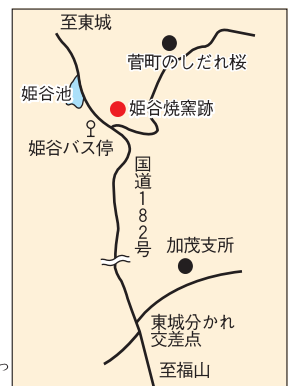
姫谷焼(伝世品)
姫谷焼中皿の優品で「色絵飛雁山水図」と呼ばれる絵柄です

ていました。現在、窯跡には柘植の低木が植えられ、窯の位置と大きさがわかるように復元整備されています。

窯跡から発見された焼き物は、染付、白磁、鉄絵、青磁、素焼品、鉄釉などの磁器類と、陶器、炆器(磁器と陶器の中間的な半磁器)類です。日常雑器というよりも高級品としての焼き物が多いのが特徴です。中皿の染付破片の中には、伝世品と照合できる飛雁山水や紅葉、桃、草花文なども出土しています。しかし、残念ですが、色絵付した仕上げの窯はどこにあったか、確認されていません。

姫谷焼の操業年代は、江戸時代の前期といわれていますが、いまだ不明の点もあります。窯跡は、広島県史跡に指定されています。

(1993年9月号に掲載)



曾根田白塚古墳 備後の終末期古墳

『日本書紀』の孝徳天皇大化2年(646年)3月甲申(22日)の条に、古墳の石室や墳丘の規模、副葬品の内容、役夫の人数、日数などを規定した「大化の薄葬令」が出されたことが記述されています。

この規定に基づいて造られたと考えられる古墳時代終末期の古墳が、畿内を中心に西日本の各地にあります。今回は、その一つである曾根田白塚古墳を紹介します。

福山市芦田町下有地の久田谷にあるこの古墳は、標高約106mの山頂近



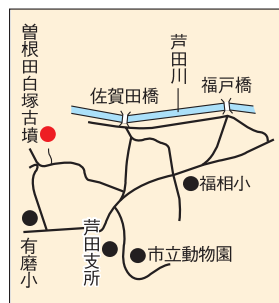
墳丘
山の入り口から約10分山道を登ったところにあります

くに造られており、その北西800mの山頂には中世有地氏の相方城跡があります。この古墳は終末期の古墳として、次のような特徴があり注目されます。

石室に入ります気つくことは、埋葬主体部である石槨よりも、手前の通路である羨道の幅が広いことです。もう少し詳しく石室の構造を観察してみましょう。石材はすべて花崗岩の切石を使用し、奥壁、天井石、右側壁はすべて一枚石です。左側壁は二枚石で、床面には敷石をしていません。また、右側壁は左との対称を強く意識して、わざわざ2個の石のごとく縦に亀裂を入れていきます。この空間が、埋葬施設の中心となる石槨で、長さは2.2m、幅と高さは1.2mの規模です。



石室の内部
主体部の石槨よりも、手前の通路・羨道の幅が広いのが分かります



奥壁と側壁とが接合する部分をみると、側壁の上端を「」状に、天井石は側壁、奥壁と接合する部分をそれぞれ若干削り込んでいることが分かります。また、石槨の前方の羨道にも、左右対称な側壁がみられます。長さ3.6m、幅1.8mで、高さは石槨部よりも38cm高くなっています。

現在では、もうほとんど残っていませんが、かつては石槨の内表面は漆喰が塗られていた痕跡があります。もしかすると、壁画が描かれていたかも知れません。

墳丘は直径約9mの円墳とされていますが、出土品は不明です。7世紀中頃以降の築造と考えられ、1981年(昭和56年)広島県史跡に指定されています。

(1993年12月号に掲載)

広島県史跡 北塚古墳 特異な家形石棺

福山市北部の服部大池から北へ約2kmさかのぼると服部永谷の北塚古墳に行くことができます。途中、西法成寺や新山といった大池周辺には、今でも多くの古墳群が残されており、古代文化が華開いたことを偲ばせてくれます。

備後南部の加茂・駅家・芦田・新市地域には、普通の古墳とは形態の異なった特殊なものがいくつか知られています。北塚古墳もその中の一つです。永谷下バス停東側の小さな橋を渡り北へ少し歩くと、観音堂に上る小さな



北塚古墳の家形石棺
入り口の小口石は失われておりあいて
います

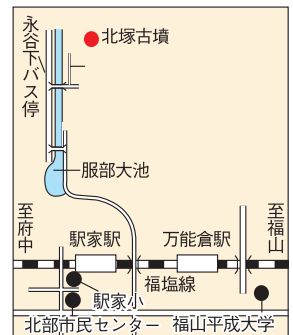
坂道が見えてきます。観音堂まで辿り着くと、南向きの小さな谷の山裾に家形石棺が露出した、北塚古墳が見えます。

この石棺は、6枚の花崗岩製切り石を組み合わせたものですが、南側の小口石は失われています。蓋石は、丸味を帯びた長方形をしており、その大きさは、長さ234cm・幅141cm・厚さ56cmです。外側の屋根部の後ろと前に縄掛け突起が陽刻されていますが、前部はあまり明瞭ではありません。蓋石の内側は、石棺の内法部分が若干彫り窪めてあります。

石棺の内法は、長さ165cm・幅70cm・高さ65cmで、人間一人やっと入れる大きさです。また、各石の接合面は少し彫り窪めて、石がずれないようにな



石棺蓋石の状況
中央部は一段彫り窪められており、内
部空間の天井となっています



工夫がされています。こういったところにも、石造技術の高さがうかがえます。

北塚古墳は、いわゆる石室がなく直接この石棺が埋められていました。墳丘はすべて失われているため、その規模は分かりません。一方で、築造された場所から、この石棺のみが後世に移されたのではないかと考え方もありました。しかし、1982年(昭和57年)、福山市教育委員会が調査をしたところ、石棺の底石の下に河原石が敷き詰められており、また、須恵器という当時の土器の破片も出土したことで、最初からこの位置に造られたものと考えられます。

築造年代は、7世紀中ごろ以降と考えられます。

※観音堂は取り壊され、現在はありません

(1994年3月号に掲載)

上原谷石灰岩巨大礫 頭上にかぶさる巨大礫

福山市山野町田原から矢川への道を約2.5km行ったところに鳥居があり、この鳥居をくぐって山道を上ると、洞窟が見えてきます。

洞窟の前に立つと、頭上にかぶさつてくるような1個の巨大な石灰岩（幅33m、高さ30m、奥行32m以上）が迫ってきます。

このあたりの地層は、今から1億年ほど前の中生代白亜紀に、川の流れによって運ばれた火山灰や石灰岩の礫



石灰岩巨大礫
とても1個の岩石とは思えないもので、見る人を圧倒します

(小石)が積み重なり固まってできたものです。しかし、この巨大礫は水で運ばれることはないので、近くにあった石灰岩体の一部が転落して入り込んだものと考えられます。火山灰や礫の堆積によってできた礫岩層に、このような巨大な岩石が混じっているのは大変珍しく、1949年(昭和24年)県の天然記念物に指定されました。

初めに紹介した洞窟は、この石灰岩巨大礫の下にあり、地下水の浸食によってできたものです。入り口の幅10.25m、奥行17mの洞窟の中には、平安時代の初めに作成された「延喜式」神名帳に載っている多祁伊奈太伎佐耶布都神社があります。多祁は「武」の

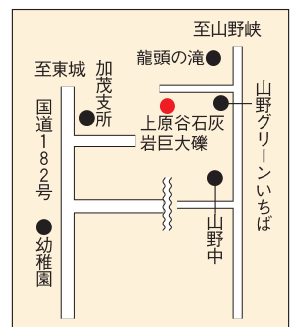


岩屋権現
ひんやりとした洞窟の中に清水の音が響きます

敬称語、伊奈太は「稲田」で氏族名、伎佐耶は「木の鞘」、布都は「剣」を表しています。このため、製鉄をつかさどった稲田氏の剣を祭ったものと解されています。

稲田氏は、出雲の氏族で、古代備後の砂鉄を求めて山野を根拠地として活躍したと考えられます。その祖神稲田宿禰命を祭った赤浜宮がこの神社の左にあり、洞窟内のこれらの祠は岩屋権現と呼ばれています。薄暗い洞窟には冷気が漂い、奥から流れ出す清水上には巨大な石灰岩という神秘さが、古代人には神聖なものと映ったよう、原始信仰の名残をとどめています。

長い風雪により、石灰岩巨大礫の表面から石がはがれ、落下する危険がありますので注意が必要です。



(1994年5月号に掲載)

県名勝 龍頭峽

涼しげな清流と天然林

緑の鮮やかな季節になりました。そこで、今回は、美しい山林に囲まれた、山野町の龍頭峽をご案内します。

福山駅前から山野田原行きのバスに乗り、終点で下車します。そこから矢川(原谷川)に沿って400mほど西へ進むと、龍頭峽の入り口に着きます。

龍頭峽は、県の名勝に指定されています。名勝は、山岳・峽谷など自然を主体としたものと、庭園・公園など人工の造形を主体としたものとに区別さ



龍頭の滝
溪流全体の形が龍に似ていることから、この名称がつけられたといわれています。龍が頭をもちあげ天に昇ろうとしている姿が想像できます。

れます。それらは、景観上あるいは芸術上たいへん価値が高いところではあります。この付近は、標高500〜600m

の波状台地であり、油木高原の一部を成しています。矢川川の支流の古谷川によって、この台地が深く刻まれて侵食谷となり、龍頭峽ができています。入り口から滝までは、溪流に沿って

遊歩道が整備されています。切り立った谷から木々の緑が頭上を優しくおおい、緑のトンネルを歩いている気分です。

また、小滝・急流・早瀬が連続し、清流が岩に砕けて白く波打つ様子は涼感満点です。岩々は苔むしており、枯れ木のかかっている光景にも風情を感じ、一幅の絵を眺めているようです。さらに、この景観に彩りを添えるのが、

周囲の常緑広葉樹の天然林です。分布



古谷川の小滝
遊歩道に沿って流れる小川のせせらぎは涼しげです

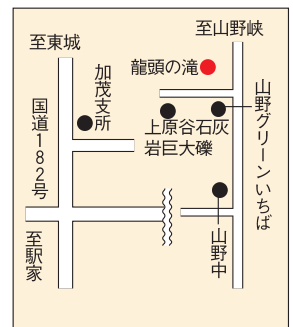
上めずらしい植物も多く、樹名を記した札が下げてあります。

奥に歩を進めるにしたがって、巨岩が目につくようになり、流れはいよいよ急に、瀬音も一層大きくなります。そして入り口から1.2kmのところに、龍頭の滝があります。

台地から57mを落下する龍頭の滝の真下に滝つぼがあり、轟音を響かせています。その落水により、風が舞い、群生するシダ類がなびき、天然のクローラーの中にある心地がします。

龍頭峽は、四季折々に姿を変え、小鳥がさえずり、時折、野猿も姿を見せ私たちを歓迎してくれます。この夏、爽快な峽谷へグリーンシャワーを浴びに訪れてはいかがですか。

(1994年7月号に掲載)

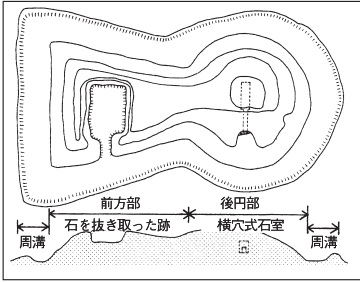


二子塚古墳

大規模な前方後円墳

福山市の北部、加茂町から駅家町にかけて広がる平野周辺の丘陵には、非常にたくさん古墳が造られています。今ご紹介する二子塚古墳は、駅家町中島の北側丘陵、標高50m地点に造られた6世紀末の古墳です。

福塩線近田駅から北に進み、線路と平行して東西に延びる古代山陽道を横切って北東の谷に入っていくと、住宅団地の弥生ヶ丘に到着します。この団地の東端に公園があり、その東側に隣接する小高い丘が二子塚古墳です。現在は立木で視界が遮られています。



二子塚古墳図
後円部と前方部の2か所に横穴式石室が築かれていたと伝えられていますが、現在は後円部のみ残っています

平野を一望できる絶好の場所に位置しています。

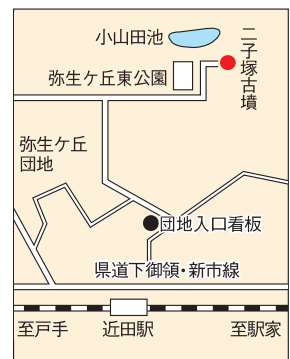
墳丘の平面の形は前方後円墳で、全長68mと、備後南部で最も大きい規模を誇ります。これだけの規模ですから、墳丘の上に立っても全体を見ることができません。小山が二つ並んでいるように見え、西側が前方部、東側が後部です。

さらに、墳丘のまわりを歩いてみると、浅い溝が巡っていることに気がつきます。幅は6mほどあり、この溝までが古墳の範囲です。

遺体を埋葬する施設は、横穴式石室で、後円部と前方部の墳丘内に造られています。巨大な花崗岩（かこうがん）を何段も積み上げた構築で、その大きさとすぐれた技術力、とてつもない労働力に驚かされます。



後円部石室の内部
巨大な花崗岩を、奥壁は一枚使用し、横壁は傾斜をつけて積み上げています



後円部の石室は、遺体を納める部屋（げんしつ）と、外から玄室につながる通路（せんどう）で構成されています。規模は、玄室が長さ6.5m、幅2.2m、高さ2.3m以上、羨道が長さ7m、幅1.4mで、全長は14m近くもあり、県下最長です。しかし、石室には土がかなり埋まっているため、内部の見学は困難です。

前方後円墳で二つの横穴式石室という備後南部であまり例がなく、しかも大規模な古墳であることから、県史跡に指定されています。

※その後の発掘調査により、墳丘や石室、副葬品などの内容が明らかになり、2009年7月23日に国史跡に指定されました

（1994年12月号に掲載）

棕山城跡

地方勢力の拠点として

棕山城跡は中世の典型的な山城です。中世の山城は、水濠をめぐらせた石垣や高くそびえる天守閣を持つ近世以後の城郭と違い、天険を利用した山丘に造られました。ふだんは、山麓に暮らす地方の有力者が、戦時の防塞として築いたものです。

棕山城が服部の有力者桑原氏の本城であったことは、江戸時代の歴史書「西備名区」「福山志料」などに記されていますが、築城の時期はよく分

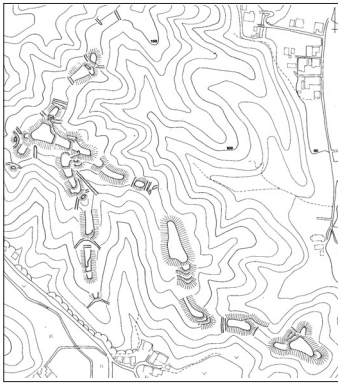


棕山城跡全景
中央の山が棕山城跡

かっていません。ただ記述から、天文年間（1540年頃）に棕山城が最も栄え、城の整備がなされたと考えられています。城主の桑原氏は、後に毛利氏の家臣として働き、棕山城は天正15年（1587年）に山城禁止令によって廃城となりました。

駅家町服部の栄昌寺の裏に、棕山城跡へと通じる登り口があります。枯れ葉の積もった山道を10分ほど登ると、両側が切り立った尾根に出ます。尾根道の両側をよく見ると、外敵の侵攻を遮断する堀切り跡がわかります。堀切り跡の多くは尾根道を断ち切る形で、10数か所確認されています。

さらに進むと本丸に出ます。標高178mの棕山山頂は広く削平されて、曲輪を形成しています。曲輪は城内の



棕山城跡略測図
1988年(昭和63年)に調査したものです。
15の曲輪が確認されています



区画単位で、本丸から北・南・南東に伸びる尾根に沿って、山全体に連なっています。各曲輪の間には意図的に段差がつけられ、攻めるのに難しく、防御しやすく配置されています。

本丸そばの第二の曲輪には井戸が掘られ、籠城の際の飲料水が確保できるようになっています。近年まで水が湧き出していました。

また、本丸一帯から採集された土師質土器・青磁片・古銭などは、室町時代後半の遺物と推定されます。

棕山城跡は小規模ですが、開発をまぬがれた結果、各曲輪・遺構の保存状態は良く、福山地方の代表的な山城として福山市史跡に指定されています。

(1995年2月号に掲載)

福盛寺

大坊と呼ばれる寺

福盛寺は服部大池の西方にありま
す。

寺伝によると、平安末期、大遍上人
が荒れていた福盛寺を風光明媚な現在
の地に移転し、それまでの天台宗から
真言宗に改宗したと伝えられています。
仁王門を建て、それより内に本坊を
中心に12の坊を造り、学問所・修行道
場として、天文・永祿頃（1560年
頃）までは大寺であったようです（『福
山志料』）。別名、大坊といわれるゆえ
んです。しかし、天正2年（1574



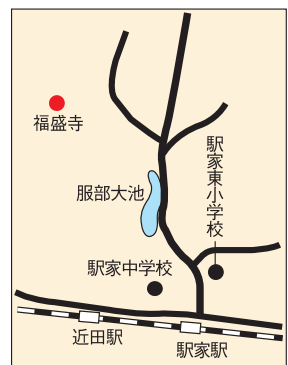
仁王門
その昔、この門をくぐり、寺を訪れた修行僧
の姿が目に見えます

年）に落雷により炎上し（『備陽六郡
志』）、古い記録などが消失したのが惜
しまれます。

仁王門に立つと、その先に細い旧道
が続いており、寺域への入り口の感じ
を深めます。しかし本堂は、はるか前
方の山の上にあります、その昔、12の坊が
あったのようなくまいます。門内には、
木造仁王立像が安置され、吽形力士の
胎内墨書によって「寛元3年（125
4年）僧昌快」により造られたこと
が確認されています。県内の指定仁王
像の中では、最も古く、巧みな彫りで
力強さを感じます。動的な彫刻の隆盛
期である鎌倉時代の貴重な仏像で、県
の重要文化財に指定されています。
また、大坊所蔵の金銅五鈷鈴も県重
文に指定されています。弘法大師が持



木戸岩
大坊九岩の一つ。この岩の間を通りな
がら見る大坊は実に堂々たるものです



ち帰ったと伝えられる唐代の作品です
が、火災に遭い五鈷の上部を欠損して
います。鈴に五大明王が彫刻され、下
部はややすぼんだ形をしており、全体
に精巧な細工を施された優品です。そ
の他にも指定文化財があり、寺宝とし
て大切に保存されています。

周辺の山には、巨岩・奇岩が点在し、
見る人を圧倒すると同時に、空想をか
き立てます。特に大きい岩には伝説も
生まれ、大坊九岩と呼ばれています。
山頂には、一面つつじが自生し、満開
にもなると、巨岩との織り成す自然の
美しさが印象的で、大坊公園として整
備されています。つつじが咲く頃、仁
王門を訪ね、大坊九岩の伝説を楽しみ
ながら、ハイキングをしてはいかがで
しょうか。

（1995年3月号に掲載）

猪の子古墳

終末期に築かれた古墳

加茂、駅家の平野部北辺の丘陵上には、古墳時代前期から後期そして終末期に至るまで、連綿と古墳が築かれました。今回は、その中で終末期に加茂谷に築かれた猪の子古墳を紹介します。終末期古墳とは、大化の薄葬令^{はくそう}などにより、古墳の築造が規制されはじめ7世紀中頃から8世紀初めにかけて造られた数少ない古墳のことです。

猪の子古墳は、7世紀後半の古墳で、加茂川と百谷川の合流地点の西丘陵上にあり、加茂平野を南に一望できる場



削って平らにしたり、土を盛ったりしたために、墳丘の規模は明確ではありません

所に造られています。国道182号の東城分かれから西に進み、丘陵中腹にある江木神社にたどりつくくと、境内の南側に、猪の子古墳の墳丘を見ることが出来ます。

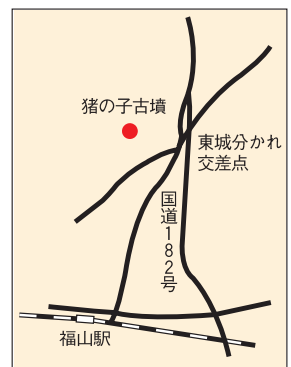
墳丘は、現在円形に土盛りされ整備されていますが、東南側の墳丘の裾が直角に曲がる所があり、方墳の可能性もあります。

埋葬主体部分は、横口式石槨^{せうかく}と呼ばれる終末期古墳特有の構造のもので、横から遺体を埋葬する点では横穴式石室と同じですが、埋葬場所（石槨）が羨道^{せんどう}よりも狭く、石棺のような形をしているのが特徴です。

石槨は、長さ2.8m、幅1.1m、高さ0.9mで、床石、奥石、両側石、天井石すべて一枚石で構成され、接合面をL字状



遺体を埋葬する石槨は大きな切石の花崗岩で造られています



に加工して組み合わせたり、内面を平滑に仕上げるなど、非常に精巧な造りになっています。また、接合部には漆喰^{しっくい}が残っており、当初は内面全体に塗られていたことが考えられ、水や外気の浸透を防ぐとともに、白壁の美しい石室であったことが想像されます。

石槨に続き、墳丘外に通じる羨道は長さ3.7m、幅1.5m、高さ1.3m前後で、やはりきれいに加工した石材で両側石と天井石が構成されています。

小規模ながら、高度な新しい技術を取り入れたこの形態の古墳は、畿内に集中していますが、ここ備後にも築かれた点で興味深く、貴重な古墳であり、現在広島県史跡に指定されています。

(1995年5月号に掲載)

山野の民俗 自然の中で育まれ

山野は市の最北端の町で、北は神石郡、東は岡山県と接しています。

町を縫うように流れる小田川とその支流が吉備高原を深く削り込み、険しい山々と深い谷のある起伏のはげしい地形をつくりだしています。海拔100～500mと標高差が大きく、町名のごとく総面積の80%以上を山林が占めるため、古くから人々は山の斜面、河岸段丘を切り開きながら、恵まれた自然の有効利用を考えてきました。山野の民俗は自然と共存の中で生まれ、育まれてきたといっても良いでしょう。林野率が高いため、人々の生活は林



山野民俗資料館

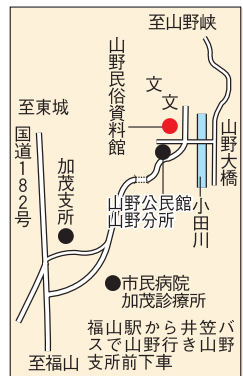
業が中心でしたが、わずかな平地を大切に、米麦やこんにやく、たばこ、野菜などを生産し、また養蚕、炭焼き、川漁といった特色ある生業も営まれてきた。

また、人や文化の交流は、小田川が岡山県に流れるため、岡山県西部地域との結びつきが深く、言葉や生活様式に共通性がみられます。

こうした山野の産業や生活様式は、戦後の急速な経済成長により独自性を失っていきます。消え去る前に、古くから使われてきた道具などから、山野の民俗を考え、現代に生かせるものを見いだそうと、山野民俗資料保存会を中心に、資料収集、公開活動のほか、炭焼き窯や水車小屋の再現、ふるさとまつりの開催などの事業も行われています。



山野の生活で活用されたさまざまな道具が並んでいます



現在、山野の民俗を物語る貴重な資料約1,200点が、山野民俗資料館に保存・展示されています。そのうち衣食住関係305点、生産、生業関係211点、その他48点が福山市重要有形民俗文化財に指定されています。資料館自体も旧山野村役場を改修した価値ある建物です。

夏のこの季節、山野を訪れ、龍頭峡や猿鳴峡などの大自然の中に涼を求めるとともに、民俗資料に接し、先人の知恵や工夫、忘れかけていた心のぬくもりを感じてみてはいかがでしょうか。

山野民俗資料館の開館日時などについて

・問い合わせ先 山野公民館

(☎) 084・974・2851

(1995年7月号に掲載)

石鎚山古墳群 備後南部の代表的古墳

石鎚山古墳群は、加茂の平野部が一望できる北向きの丘陵にあり、2基の円墳からなります。1979年の発掘調査後、墳丘の盛土などの復元整備が行われ、現在では古墳公園として自由に見学ができます。第1号古墳は4世紀ごろに、第2号古墳は4世紀末から5世紀初めに造られたものです。

南東から坂道を登っていくと、正面に見えるのが第1号古墳です。径20m・高さ3mで、すそには20cmほどの平石が並べられていました。内部からは、二つの埋葬施設（死んだ人を納め



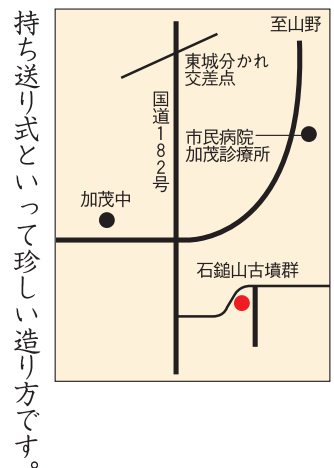
石鎚山1号古墳
石室や排水溝の位置を示す表示板があり、分かりやすくなっています

た部屋や棺）が発見されています。いずれも竪穴式石室と呼ばれるもので、まず中央にあるものは、長さ5m・幅3m・深さ2mの掘り込みに割石を積み上げて造られていました。石室内には木棺が安置され、棺内には多量の朱が塗られていました。

また、石室の底から墳丘西側のすそまでは、割石を敷き詰めた排水溝が設けられていました。これは、石室内に水がたまらないようにするためで、現在でもその働きを十分しています。このような細かい点に配慮した、当時の人々の知恵と技術には驚かされます。1m東にあるもう一つの石室は、蓋石がなく、側壁を少しずつ内側へ傾けて積み上げられており、そのまま上部をふさぐ形になっていました。これは、



1号古墳1号竪穴式石室
(財)広島県埋蔵文化財調査センター提供
発掘当時のもので、割石を積み上げて造られている様子が分かります



持ち送り式といって珍しい造り方です。第2号古墳は、1号古墳の南東20mにあり、径16m・高さ2mで、こちらにも埋葬施設が二つありました。一つは、掘り込みに直接木棺を納める造りに、もう一つは木棺の外側を粘土で被覆する粘土槨と呼ばれる造りになっていました。

第1号古墳からは斜縁二神二獣鏡、玉類、鉄剣、鉄鏃、銅鏃が、第2号古墳からは内行花文鏡の破片、刀子、鉞が出土しました。これらの出土品は、県の重要文化財に指定されています。両古墳とも、古い時期の古墳の特色を示しており、備後南部の古墳を代表するものとして学術的評価が高く、県の史跡に指定されています。

(1996年3月号に掲載)

掛迫6号古墳

市内有数の前期古墳

福山北養護学校の裏から北西を望むと、北東から南西にのびた低い丘陵が目に入ります。その丘陵上に掛迫6号古墳があります。

1954年に、この地域では初めての発掘調査が行われ、多くの人々の注目を集めました。その報告書によると、墳形は全長46.5mの前方後円墳で、後円部の直径は27.5mと推定されていますが、前方部の形状は不明瞭で、直径は約25mの円墳の可能性も考えられています。墳頂に立つと露出した地



古墳全体を見ると、高く盛り上がった後円部の部分がよくわかります。ここに2つの石室があります

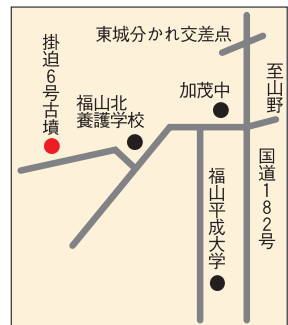
山が見られ、山丘の自然地形を整形して造営されたことがわかります。

主体部は、南北に並んだ2基の竪穴式石室ですが、調査時点ですでに蓋石は一部取り除かれ、あるいは石室内に落下し、かなり崩壊が進んでいたようです。両石室とも底に直径5cmほどの河原石と粘土とを平らにつき固めて床面にしています。四方の壁は、石英斑岩の板石と花こう岩を小口積みにして構成し、大型の板石を蓋石としていました。しかし、現状は蓋石は全部取り除かれ、四壁も崩れて、石室の傍らに板石が積み重ねられています。

使用された石材については、神石郡油木町（現在は神石高原町）あたりから搬出されたと報告されていますが、福山市教育委員会の最近の調査では、



北側石室(写真右)が男性、南側(同左)が女性のものと思われます



同種の石材が山野町七谷でも産出することが確認されており、距離的に近い山野産の可能性は高いと考えられます。

副葬品の数は少なく、北側石室からは、だ龍鏡1面など3点と人骨1体分が確認され、南側石室には、硬玉製勾玉1点、ガラス小玉17個と人骨の歯だけが残っていました。ただ、調査以前に南側石室から日本製の三角縁神獸鏡が発見されています。これらの出土遺物や石室の形態から、築造は5世紀の初めと考えられ、市内では貴重な前期古墳の一つに数えられています。

この6号古墳の周辺丘陵上には、小古墳が点在して掛迫古墳群を形成し、中世の山城、掛迫城跡もあります。南には芦田川の沖積平野が一望でき、絶好の遺跡散策コースといえるでしょう。

(1996年5月号に掲載)

池ノ向製鉄遺跡 めずらしい製鉄炉跡

加茂町上加茂にある菱原池周辺の丘陵には、県史跡の石鎚山古墳群をはじめ多くの遺跡があります。

池ノ向製鉄遺跡は、1993年に菱原池北東の低丘陵の谷あいにて開発事業の計画があり、試掘調査の結果、発見されたものです。

重機で表土を除去すると、製鉄の際に不純物が高熱であめ状に溶けそのまま固まった鉄滓や、炉壁片が多数散布していることがわかり、製鉄遺跡の存在が明らかになりました。同時に出土した坏、甕、壺などの須



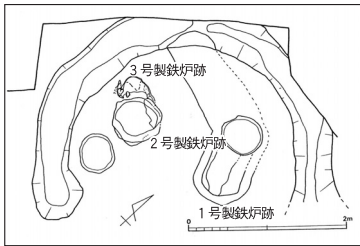
製鉄遺構全景(南から)

恵器の形状から、8世紀後半の奈良時代から平安初期にかけての遺跡であると考えられます。

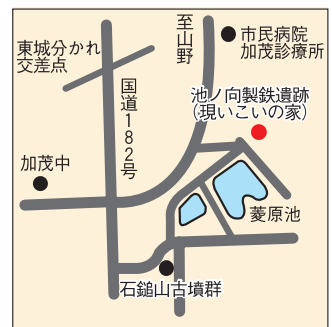
鉄滓の化学的分析の結果、鉄鉱石や砂鉄などの原料と、燃料の木炭から粗鋼をつくる製錬炉であったことがわかりました。

備後地方南部では製鉄遺跡はめずらしく、発掘調査をして記録保存することになりました。調査の結果、3基の製鉄炉跡と、それを取り巻く排水溝などを検出しました。

古代の製鉄炉は粘土で築かれていますが、1回の操業ごとに炉は壊され、中の鉄が取り出されるので、ほとんどの製鉄遺跡では、炉の本体は残っていません。この遺跡でも炉床部が残っているだけです。



遺構配置図



一番大きな炉跡は、隅丸方形と呼ばれる角が丸い長方形で、長径が1.2m、短径が0.7mです。炉床部での壁厚は約10cmでした。残る2基の炉跡は、一方が壊された後に他方が重なるように築かれており、いずれも円形で径0.6mでした。

また、炉跡の約6m南側では、炉に風を送る、小さい筒である、土製羽口片も多数見つかりました。先端部は高温のため溶けています。

備後を含む当時の吉備地方は「真鉄吹く吉備」と歌われているように、鉄の生産が盛んに行われていたようです。調査後、3基の製鉄炉跡は、地表面ごと切り取って薬品処理をして保存しました。

(1997年9月号に掲載)

才町茶白山遺跡 大きな勢力の存在

JR福塩線戸手駅から南へ1.5kmの小さい高い丘陵の東南端に、芦田町福田の才町茶白山遺跡がありました。この地は芦田町から、駅家、神辺町を一望できる、古墳の立地としては絶好の場所です。この丘陵の開発に伴う事前調査の結果、古墳の存在が確認され、1996年に市教育委員会が発掘調査を行いました。しかし、調査時には、すでに一部は削られており、崩落の危険があるため、調査後取り壊されました。この調査により、次のものが検出されました。



古墳中段貼石

古墳 丘陵の最高所に築かれた直径20m、高さ3mの円墳で、中段には貼石を巡らせていました。主体部（遺体を納めていたところ）は、後世に破壊され構造は不明ですが、長さ5.2m、短径3.8m、深さ1.5mの楕円形の墓壇（遺体を納めた穴）の底面に粘土と礫を敷き詰めた跡が一部残っており、竪穴式石室が中心施設として存在していたものと考えられます。主体部からの出土遺物はなく、頂上付近の表土中から銅鏡片が見つかっています。この古墳が造られた時期は、古墳時代前期（4世紀）ではないかと考えられます。近くには同時期の古墳として長迫2号古墳（駅家町大橋）、石鎚山1号古墳（加茂町上加茂）などがあり、市内でも比較的早い時期に造られたものでしょう。



才町茶白山遺跡の墓壇

墳墓 古墳南側で検出された墳墓は、弥生時代末期（3世紀後半）のもので東西9m、南北4～6mの方形で高さは1m。斜面に貼石を巡らせて区画していたものと考えられますが、東斜面のみ残っていました。区域内に2基の埋葬施設を確認しました。どちらも木棺が納められていたものと考えられ、一方からはガラス小玉、製鉄品、もう一つの施設からは勾玉、管玉、ガラス小玉が発見されました。

これらのほかには、弥生時代後半（3世紀）から古墳時代初めにかけての各種墳墓、平安時代から江戸時代初めの建物跡、柱穴列などがありました。このことから、芦田地域は早くから拓かれ、大きな勢力が存在していたことが考えられます。



（1997年11月号に掲載）

加茂倉田遺跡

めずらしい銅鏡出土

この遺跡は、加茂町下加茂の倉田池近くの低丘陵上にあります。眼下には加茂平野が広がり、国道182号を走らせて南東丘陵上には県史跡の石鍬山古墳群が対峙しています。

これまでの分布調査で、この丘陵には正福寺裏山1号古墳と前方後方墳といわれる2号古墳の存在が知られてきましたが、道路開発に伴い1号古墳とその周辺の発掘調査を1996年度に市教育委員会が実施しました。

調査の結果、古墳だけでなくさまざまな土壌墓や箱式石棺などが検出され、



正福寺裏山1号古墳

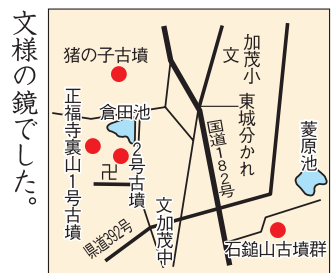
これら全体を地名から「加茂倉田遺跡」と名付けました。

1号古墳は丘陵の最頂部に位置しています。墳丘は直径16mの円墳で、その中央に遺骸を埋葬する施設として竪穴式石室が造られていました。石室は多数の板状割石を水平に並べて積み重ねながら構築していましたが、どの壁面も上部は石材を徐々に持ち送り、内側に傾斜させています。また、床面中央から墳丘北側に向けて幅0.4m、長さ7mの暗渠排水溝が付属され、石室内に入った水が外に抜ける工夫がなされていました。長さ2.5m、幅0.8m、高さ0.8mの石室内は大量の朱で赤く塗られ、床面北東端から銅鏡が出土しました。

この鏡は、外縁に円弧文を連続して巡らせ、内側に簡略化した獣の文様を4か所に配置した直径10・2cmの「連弧文縁四獣鏡」で、現在までわが国でも中国でも出土していないめずらしい



1号古墳から出土した連弧文縁四獣鏡



文様の鏡でした。

これらのことから、この古墳は石鍬山古墳と同じ前期古墳と分かりました。この古墳に続く東の丘陵には、弥生時代後期から古墳時代にかけての素掘りの土壌墓約80基と箱式石棺3基が密集して造られていました。いくつかの土壌墓からはガラス製の小玉が、2基の箱式石棺からは朱で塗られた人骨のほかに、鹿の角を柄にした刀子などが出土しています。

また、すぐ近くには終末期古墳として貴重な県史跡「猪の子古墳」もあり「石鍬山古墳群」同様整備されていますので、見学には便利です。

※この遺跡は発掘調査後、道路建設のため、粟塚古墳の丘へ移築されています

(1998年1月号に掲載)